



スパルタン Vim 2.0



# スパルタン Vim 2.0

Vim ニンジャスレイヤー

# スパルタン Vim

## キリング・キーボード その 4

---

スパルタン Vim 2.0 第 1 部「ネオ・アキハバラ炎上」より「キリング・キーボード その 4」

(これまでのあらすじ)モータレス・エディタ・シンジケートの手先タイプスピード・ニンジャの罠にはまり Vim ニンジャはネオ・アキハバラのジャンク屋通りにて窮地にたたされていた。

「イヤーッ!」「グワーッ!」Vim ニンジャの目にも止まらぬエディット・ジツがタイプスピード・ニンジャに炸裂した。Vim ニンジャのキータイプはあまりの速さのため、その摩擦熱と衝撃に普通のキーボードは耐えられない。5 つめのキーボードは爆発四散した。

実際、Vim ニンジャがその真の実力を発揮するためには HHK Pro 2 などの一部のキーボードが必要となる。もちろん普通のキーボードが使えないわけではない。だがそうした場合、Vim ニンジャの速度は 80%ほどになってしまう。

また英語配列であることも重点だ。Vim ニンジャのニンジャ・ソウルは海外と縁が深く、ゆえに英語配列との相性が良くなるのはチャメシ・インシデントなのだ。なお日本語配列を使わせた場合、Vim ニンジャの速度はやはり 80%になってしまう。

その意味でタイプスピードの作戦は成功していた。メモ帳ニンジャはネオ・アキハバラのジャンク屋ならば 1 つ 1000 円以下で売っ

## スパルタン Vim

ているであろうメンブレン方式、しかも親指シフト日本語配列キーボードを使わざるを得ない状況に追い込んでいたのだ。なんと  
いうヒキョウ!

Vim ニンジャはベスト時の約 60%の速度でタイプスピドに相対することを強いられていた。そうでなくてもタイプスピドの速度は Vim ニンジャのそれを上回ることに実に 140%。その差はなんと 4 倍にも達しようとしていた。

だが Vim ニンジャは慌てなかった。速度は Vim ニンジャの強さ = エディット・ジツを構成する多くの要素の一つに過ぎない。強さの本質は速さではないのだ。

さらにタイプスピドの誤算もあった。キーボードを変えた Vim ニンジャが遅くなるのは速くタイプできないからではない。誤タイプを避けるためと、何よりもキーボードが壊れてしまうのを避けるためなのだ。キーボードが壊れてしまえばいかに Vim ニンジャと言えどもエディット・ジツを繰り返せなくなってしまう。

しかし店先にキーボードが山のようにうず高く積まれたジャンク屋ひしめくネオ・アキハバラの裏路地でキーボードを失う心配をする必要が Vim ニンジャにあるだろうか。いやない!

「ドドドドドドド!」誤タイプはさらなる速度で補えば済む。Vim ニンジャは慣れない日本語配列に誤タイプを繰り返すが、通常の 3 倍の速さでそれを修正していく! キーボードが壊れることを気にしなければさらに 3 倍! タイプスピドの約 10 倍にも達する

速度でキーボードを叩く。ワザマエ!

「ドーンッ!」 そうやってタイプされるキーボードはわずか数秒で爆発四散する。すぐさま Vim ニンジャはジャンク屋からキーボードを失敬する。もちろん代金など払わない。いや無一文なので払えない。

「アイエーッ?!」ジャンク屋の主人がキーボードを奪われる度に悲鳴をあげる。慈悲はない。

「イヤーッ!」「グワーッ!」「ドーンッ!」「アイエーッ!」「イヤーッ!」「グワーッ!」「ドーンッ!」「アイエーッ!」「イヤーッ!」「グワーッ!」「ドーンッ!」「アイエーッ!」攻撃を繰り返すこと 16 回。タイプスピードはついに動かなくなった。ジャンク屋の主人はすでに失禁している。

「ハイクをよめ、カイシャクしてやる」 Vim ニンジャはタイプスピードに歩み寄った。だがタイプスピード・ニンジャはニヤリと笑みを浮かべ高速に指を動かした。最後の力を振り絞り、タイプスピードは爆発四散! Vim ニンジャを巻き込んだ。

「'backupdir'がなければ死んでいた」なんと Vim ニンジャは無事だった。そうして Vim ニンジャはジャンク屋の主人を横目に人通りの多いメイド・キッサ通りに姿を消した。(「アンデッド Vim」に続く)

## コンプリート・ミッション その 2

---

スパルタン Vim 2.0 第 1 部「ネオ・アキハバラ炎上」より「コンプリート・ミッション その 2」

(これまでのあらすじ)ブイスト・ニンジャとニシヨク・ニンジャの作戦によりソコソコカイ・ビルのオフィスフロアで囚われの身となった Vim ニンジャ。ショッギョ・ムツジョ!

「グハハ!手も足も出まい!」ブイスト・ニンジャとニシヨク・ニンジャが声を揃えて言う。実際、Vim ニンジャは彼らの使うホカン・ジツにとらわれ、四肢の自由が奪われていた。いわば Vim ニンジャの命はロウソク・ビフォア・ザ・ウィンドであった。

ホカン・ジツとは高度なエディット・ジツの 1 つで、特定の状況であれば周囲のアトモスフィアに合わせて適切なワザを半自動的に繰り出すという超スゴイ級のジツなのだ。実際スゴイ!

「さあさあブイスト=サン、とどめを刺してください」ニシヨクが勧める。「そんな悪いですよ、ニシヨク=サンこそ」ブイスト=サンは奥ゆかしく応えた。彼らはニンジャとなる前、サラリマンのカチグミの同僚同士だった。サラリマンの間ではどちらか一方が手柄を独占することはムラハチの理由となり、カチグミのルールから外されてしまうことを意味する。彼らがニンジャとなった今でもそのとき身についた習慣は抜けていないのだ。



## Vim ニンジャスレイヤー

「では二人同時に刺しましょう」「そうしましょう」「「ユウジョウ!」敵ながらなんという奥ゆかしさ!

「ワッショイ!」だが Vim ニンジャはその一瞬の間を見逃さない。確かに四肢はブリストとニシヨクのホカン・ジツで動かさない。四肢どころか大半の指すら動かさない。だがなんたるユダン! Vim ニンジャの両手の小指は動かせるままだった。Ctrl-P ホカン・ジツ!

Vim ニンジャのホカン・ジツは一般的にはブリストとニシヨクが使うホカン・ジツよりも劣るとされている。というのも Vim ニンジャのジツはアトモスフィアへの適応力がより原始的で低く、かつ完全な手動なのだ。

にも関わらずこの場において Vim ニンジャは彼らのホカン・ジツを彼らよりも劣る同様のジツで打ち破った。なぜか?ジツへの理解の深さと思考の速さの違いだ。Vim ニンジャは己のジツが彼らのものより適応力は低いが発動までの時間が速いことを知っていた。ゆえにニンジャ高速思考を駆使すれば彼らのジツの弱点を突くワザを、小指 2 本で 0.01 秒以内に発動させることができた。タツジン!

「イヤーッ!」ジツから抜けだした Vim ニンジャは 3 回のバックフリップを決め、最後の 1 回を通常より高く飛び、そのまま床がけてキック!ニンジャ脚力で床をぶち抜き、その穴へ逃げ込んだ! イチモクサン!

## スパルタン Vim

「マテコノヤロー!」 Vim ニンジャが逃げ出したことに気がついたブイストとニシヨクは慌てて Vim ニンジャを追いかける。老朽化したビルは地下スラムに繋がっておりそこに逃げ込まれたら見つけ出すのが一苦労だ。

しかし数階を降りたところで Vim ニンジャに追いついた。どうしたのか。Vim ニンジャは手負いとはいえ、ここで遅れを取るようなことはない。

「観念しましたか。ハイクを詠んでください。カイシャクします。」ホカン・ジツを発動させながらブイスト・ニンジャが近寄る。…変だ。ブイストのホカン・ジツの効果がない。発動していればもう何秒も前に Vim ニンジャの首は胴体とオサラバしていたはずだ。

「アイエーッ!ナンデーッ!」異変に気がついたのはニシヨク・ニンジャだった。彼のホカン・ジツもまた発動しなかったが、彼が驚いたのは目の前の上半身と下半身が別れたブイストの姿にだった。当のブイストは何が起こったかやっとう理解しようとしていた。インガオホー!

「オタッシャデー!」己の死期を悟ったブイスト・ニンジャは自ら爆発四散し、跡形もなく消し飛んだ。Vim ニンジャは爆発の際の破片をブリッジで避けると、そのままネックスプリングで起き上がり、元の姿勢に戻っていた。ワザマエ!

「なにをした?!」「ホカン・ジツだ」「何だと?我々のジツは発動

## Vim ニンジャスレイヤー

しないのに!」「メイドの土産だ、教えてやろう。この場所をよく見るが良い」ニシヨク・ニンジャはあたりを見回す。

「ハッ?!ここは?!」薄暗くて気が付かなかったが、この階は先程まで Vim ニンジャが捉えられていたオフィスフロアとは全く異なるレジデンスフロアだった。なんたるウカツ!

ブイストとニシヨクのホカン・ジツは実際高性能である。だが使える場所、アトモスフィアには大きな制約がある。彼らの場合はレジデンスフロアは全くの想定外。Vim ニンジャはその制約を一瞬のうちに見抜いた。しかも Vim ニンジャのホカン・ジツはアトモスフィアとは関係なく機能するのだ!タツジン!

「ニシヨク=サン、殺す前にお前には聞くことがある。素直に答えればカイシャクしてやる。1年前、ネオ UDX ビルを襲撃したニンジャは誰だ?」ニシヨク・ニンジャの体は Vim ニンジャのホカン・ジツで動かない。（「コンプリート・ミッション その 3」に続く）

## ユビキリ・コミットメント その 7

---

スパルタン Vim 2.0 第 1 部「ネオ・アキハバラ炎上」より「ユビキリ・コミットメント その 7」

(これまでのあらすじ)1 年前の襲撃で廃墟となったネオ UDX ビルの地下電算室で待ち受けていたのは襲撃の主犯である Emacs ニンジャだった。宿敵に戦いを挑む Vim ニンジャ。戦い始めて既に 4 時間。打ち合う事、数千、数万回!その決着の時が迫っていた。

「イヤーッ!」「イヤーッ!」Vim ニンジャがエディット・ジツを繰り返す。それとまったく同じジツを持って防ぐ Emacs ニンジャ。このような戦いがかれこれ 4 時間にわたって続いていた。

ここまで 2 人の実力は互角であった。多彩なジツとワザを繰り返す Vim ニンジャはスゴイ!それを的確に防ぐ Emacs ニンジャもスゴイ!

「ハア…ハア…」だがここにきて明らかに Vim ニンジャの息が乱れている。それもそのはず Vim ニンジャはその身に宿るニンジャ・ソウル=Vim スクリプトと融合していない。ある意味で付け焼刃なのだ。

一方の Emacs ニンジャはニンジャ・ソウル=LISP と融合するために遺伝子サイバネティクス技術により生み出された。まさにニンジャの中のニンジャと言える。ニンジャ・ソウルにより生み出

## Vim ニンジャスレイヤー

されるエディット・アトモスフィアを巧みに操る Emacs ニンジャは実際ヤバイ。

この違いはドングリ・コンペティションとはいかない。ゆえに高度なジツを繰り出した場合における消耗は Vim ニンジャのほうがわずかに多くなってしまう。わずかずつではあるが長時間に及ぶその蓄積は確実に Vim ニンジャを追い込んでいるのだ。ショッギョ・ムッジョ!

「息が上がっているな。Vim ニンジャ=サン」 Emacs ニンジャの目には余裕の光が灯る。「……」対する Vim ニンジャは応えない。いや応えられないのだ。余計な体力を使い、息を乱せばやられる。

「イヤーッ!」ここに来て初めて Emacs ニンジャが攻撃を仕掛けた。「イヤーッ!」かろうじてそれを防ぐ Vim ニンジャ。普通のニンジャなら失禁している。

「イヤーッ!」「イヤーッ!」「イヤーッ!」「イヤーッ!」ニンジャ・ソウルと完全な融合をしている Emacs ニンジャの攻撃はスゴイ。Vim ニンジャは全身でそれに耐える。だがそれもいつまでもつか。Vim ニンジャの敗戦・アトモスフィアが濃くなってゆく。

「ハイクを読め。カイシャクしてやる」そう言いながらも Emacs ニンジャは攻撃の手を休めない。慈悲はない!

「アイエーッ?!」トドメを刺そうと一段と強いワザを繰り出そうとした Emacs ニンジャの動きが止まる。動かない?いや動けない! Emacs ニンジャは両手のひらを天に向け、その小指を見ている

## スパルタン Vim

ではないか。ケンショウエン?!

Emacs ニンジャのジツは確かに強力である。だが発動にはその小指が大きな役割を果たしている。Emacs ニンジャにとって小指が叩く Ctrl キーは全てのワザの起点であり、多くのワザの中継点であり、大半のワザの終点なのだ。だからその小指に異変をきたすということは Emacs ニンジャにとっては死に等しい。ナムアミダブツ!

Emacs ニンジャの小指の故障は偶然などではない。Vim ニンジャである。Vim ニンジャはこの 4 時間というもの Emacs ニンジャがジツを返すのにその小指に負担がかかるジツを故意をもって選択していた。しかもそれをここまで Emacs ニンジャに悟られないように!タツジン!

Vim ニンジャのジツは消耗が多いものの指への負担という意味でははるかに軽い。如何にスゴイ級のエデット・ニンジャであっても指が動かなければジツを繰り出すことはできないからだ。

「Vim ニンジャ=サン、まさか最初からコレを?」 Emacs ニンジャが問う。「……」 Vim ニンジャは先程と同じように応えない。しかしその目の奥の殺気立った光は肯定していた（「ユビキリ・コミットメント その 8」に続く）

## Vim ニンジャスレイヤー

## あとがき

---

なんか真面目な話の続きを書こうとして、気がついたらこんなことになっていました。

| 実用書だと思った?残念!ファンタジーでした!

自分でもこんな感じ。実用書を期待していた方には申し訳ありません。私としては…愉しんで貰えれば幸いです。

短いですが最後に謝辞を。まずパクリ元のニンジャスレイヤー。今度発売される書籍は速攻で予約しました。1.0 に引き続き表紙を書いてくれた@ebicue さん、コミケ参加の仕込み全般をしてくれている@rin2\_さん、最初の読者となり感想を届けてくれた@nyachi さん…本当にありがとうございました。

2012/08/11 村岡太郎 (KoRoN, @kaoriya)





